



なにわ閑話

大阪取引所
代表取締役社長

岩永 守幸

大阪勤務となって1年半が過ぎた。関西は、発祥の地だけあって、古典芸能観劇が身近である。今春の桜の時に、国立文楽劇場で文楽を観る機会を得た。義経千本桜という演目で、太夫や三味線の肩衣を含め、舞台一面が桜色に染め上げられ、吉野に行かずとも千本桜を愛でられたなか、たかが人形浄瑠璃と思うなかれ、「太夫」の切ない語りと「遣い」のしとやかな人形操作により、主人公（鼓の皮となった狐の子）の親に対する深い情愛の思いがジーンと伝わってきた。後日、同じ演目を京都南座での歌舞伎で観たが、歌舞伎の役者さんがまだお若かったせいか、主人公の切ない思いは文楽の大御所の語りによる方がより強く迫ってきた。リニューアルされた大槻能楽堂ではお能を観た。閉演後に舞台裏を見学させてもらったばかりか、お能のおモテ（お面）をつけ、「橋渡し」をしずしずと、足の裏を床につけたまま滑るように歩きながら「本舞台」まで進む経験までさせてもらった。この貴重な機会を授けてくださったお方に深謝。

昨年末の大納会から大阪取引所でもゲストをお招きした。大河ドラマ「青天を衝け」で、東西の取引所の設立に深く関わりのある渋沢栄一役の吉沢亮さん、五代友厚役のディーン・フジオカさんをそれぞれでお迎えできることが決まったのは、ゲスト公表日の3日前。この上ない幸運であった。大阪でのディーンさんのスピーチは、「五代さん

は大阪の恩人と呼ばれているが、私にとっても五代さんは恩人」と始まり、作曲しているときに五代さんが夢枕に立ったとか、大阪でのライブツアーの最



終日が五代さんの誕生日だったとか、作り話でないリアルな五代ネタを披露し、最後の「五代友厚公の志を受け継いだ大阪取引所が世界の金融ハブの一つとして、そして、国際金融都市OSAKAとしても、益々のご発展を祈念する」とのかっこいい締めの部分まで文字通り役者がセリフを語るかのようなだった。その日の夜、ディーンさんのファンのSNSに「ほかの人は原稿を見ながらだったのに、ディーン様は何も見ずに素晴らしい」との書込みを見つけた。「『原稿を見ていたほかの人』って俺のこと？それなら、年明けの発会では俺も何も見ずにやってみるか」と思い、年明け大阪に戻る新幹線の中で挨拶文をブツブツ暗唱した次第。今年の大納会も大阪で盛り上げていきたいが、来年大発会には大阪ならではのスペシャルゲストをお招きする予定なので乞うご期待！